

幼いころに見た、
舞台上で舞う父は、いつも輝いていた。
その姿に憧れて、
舞台に立つと決めた。

吉和神楽団

やまもと・まさや
山本 正也さん (24歳)



お父さんが吉和神楽団に所属し、その舞う姿を見て、「いつかはあの舞台に立ちたい」と11歳で神楽を始める。吉和子ども神楽団第1期生。吉和と神楽が大好きで、「生まれ育ったこの場所でずっと神楽を続けたい」と、就職先も吉和を選んだ。団では大太鼓などの楽だけでなく、舞方も務める。

神楽で流れる奏楽は「楽」と呼ばれ、主な楽器は「笛」、「手打ち鉦」、「小太鼓」、「大太鼓（大胴）」の4種類。それぞれが主旋律を奏でる演奏の主役である。並び方は観客席から見て手前から笛、手打ち鉦、小太鼓、大太鼓の順に座る。いつも楽器以外何も持たずに演奏するが、それは神楽には楽譜が存在しないため。太鼓はもとより、笛にも楽譜はない。奏者は前演目の全拍子を「耳」と「体」で覚えているという。

吉和神楽団の山本正也さんは、「楽の拍子は、団に入る前の小さいころから聞いていたので、身体で覚えています」と笑って話す。子どものころから大太鼓を打っていたという山本さん。最初に打った演目は「弓八幡」。それでも4カ月以上必死で練習したといいます。楽の拍子は演目の場面によって異なり、恐ろしさや残酷さをイメージさせる「鬼拍子」や、善役と悪役の壮絶な対決シーンを表現する「立ち会い拍子」など、演目で流れる楽は神楽の「核」と言われるほど重要な存在。「場面に応じた楽の強弱は、神楽の見どころの一つです。特に合戦の場面では、生死をかけた闘う者同士の激しい戦闘を表



大太鼓を打つ山本さん。斬り合い、回転など激しい舞を急テンポな拍子で肉薄する場面は圧巻。体が震えるような音が飛んでくる。舞に引き込まれるのも、この楽があっただけ。

現します。楽が出す掛け声にも注目してみてください。」「同じ団員でも、楽に携わっていない者には、楽はできない。それほど難しいものなんです」と団員の一人は言う。「先輩から教えられたことを今の子どもたちに全て教えたいと思っています」と後進の指導にあたる山本さん。「舞と奏楽で、観客と一体になれるのが神楽の魅力。それぞれの人が絡み合って完成する舞台を見てほしいです」と話す。

かぐらびと 神楽人 壱

楽 が く

音曲担当のスペシャリスト

かぐらびと 神楽人

神楽に生きる人に迫る—

神々が舞い、武士が叫ぶ。
鬼が飛び、姫が泣く—
その舞に、その響きに、先人たちも陶醉し、後世に伝え残そうとした「神楽」。時を超えて、夢の糸を紡ぐ、継承者の姿がそこにある—。

「滝夜叉姫（たきやしやひめ）」—玖島神楽団—

天慶の乱（てんぎょうのらん）で敗れた平将門（たいらのまさかど）の娘、五月姫（さつきひめ）。父の仇を討たんと、妖術を授かり、名を滝夜叉姫と改め、謀反を企てた。主人公の大宅中将光圀（おおやのちゅうじょうみつくに）とその従者は、帝の命を受け、滝夜叉姫の成敗に向かう。手下の夜叉丸と蜘蛛丸を退け、姫と対決。姫が繰り出す妖術に立ち向かい、ついに姫を倒す。舞方は、国広達也（くにひろ）・たつやさん（25歳）。「団には高校生を始め、若い人がたくさんいます。その手本になるような舞を舞いたいです」と話してくれた。